

作品発表

# 冬の終わりから春へ，そして秋へ（5）（写真）

## Late Winter through Spring until Autumn (5) (Photograph)

藤原 等\*

Hitoshi FUJIWARA



\*北翔大学北方圏学術情報センター研究員（北海道学習社会総合研究所・旭川写真事務所所属）















## 『冬の終わりから春へ、そして秋へ(5)』制作ノート

1. この7点の作品はすべて2009年の撮影で、新作である。フィルム撮影が約10%、デジタル撮影が約90%になってしまった。そしてこの7点の作品は、すべてデジタルカメラによる撮影である。本学の過去の紀要等に掲載されているボクの作品は、すべてフィルム撮影によるものだから、ある意味でボクにとっては、革命的なできごとである。ボクは白黒フィルム写真から始めてとうとうデジタル写真になったのだ。まさに、日本の戦後の技術史そのものを撮影者として歩いてきたわけである。しかし、フィルム撮影を捨てたのではない。こだわりは残っているのだ。
2. デジタル撮影が約90%になって、圧倒的に撮影数が増えた。2009年のデジタル撮影数は約3万枚という、かつてフィルム撮影主流時代に経験したことのない数になった。約3万枚の画像をどのように絞り込んでいくかが問題であった。延べ2か月くらいを費やしただろう。
3. これは、ネイチャーフォト乃至、風景写真の宿命とも言えるものである。一期一会であり、同じポジションに毎年立っても、視覚像は全く異なるのであるから、時間の許容範囲で、なるべく多くシャッターを切る。ボクの場合は、すべてカメラのファインダー像でシャッターを切る。この意味では、デジタルカメラの液晶モニターは一切使わない。だからフィルムが、撮像素子に代わっただけである。でもロケーションの帰途や宿泊先ではデジタルカメラの液晶モニターは、撮影画像を再生視認できるので楽しい。信号喪失には最大限の神経を使う。
4. フィルム撮影であっても撮影済のフィルムの保管や現像所での処理など不安はあったが奇妙に信頼感のようなものが存在していた。最近いわゆる街のDPE店が激しく廃業に追い込まれ旭川ではボクの場合で信頼できる現像所は4店しかないのである。内2店は全国ネットの首都圏の店である。地元で生き残ったのは2店である。
5. 1980年代旭川には、地元で約40店のDPE店が存在していた。またカラーポジフィルムの現像は、2008年から北海道内では処理でき無い。富士フィルムでは千葉まで送料自己負担で送らなければならない。他のメーカー製のポジも東京のプロ現像所まで送付しなければならない。これが最大級にもてはやされたグローバル経済の帰結であり、地方、地域切捨ての現状である。北海道新幹線の札幌延伸で切捨てられる在来線の住民の声を聞いているのか。札幌圏の人間は、余りにも鈍感なのではないか。札幌以北・以東の人たちには

恩恵のない話なのだ。そういう思いで、北海道の自然風景を撮影した。相変わらず、今回作品群をまとめるにあたり絞り込みに失敗した。どうやら、色彩を置きにかかっていると反省している。

## 6. 使用したカメラは次の通りである。

- ①フジフィルム・ファインピックスS 5 プロ
- ②ニコンD300
- ③キャノン EOS50Dと5 D
- ④オリンパスE 3とE30

(2010年2月22日・藤原 等記.)

以上